

## 第三回大会記事

本会第三回大会は、去る十月十六日、弘前大学

文理学部において、以下の如き要領で開催された。

。拙著発表会（九〇。一二。〇〇） 於日香教室

（題目、代名は要旨と共に後掲）

。総合並びに懇親会（一一。一一。三三。） 於会議室

。マライド写真（二三。三。一三。〇） 於日香教室

常盤野、湯ノ沢及び大森勝山の

堅穴住居址とその出土遺物 （解説） 村越 潔

当日は会員の多数参加をえて、三氏の研究発表、

次いで懇親会席上での諸氏の近況報告等、学会と

して、又懇親の面に於ても、その実をあらわること

が出来たことは同慶の至りであった。

マ、村越氏に担当して載いたマライドは弘前市

の三十三年度より三ヶ年計画で行われた岩木山麓

に於ける古代遺跡発掘調査の一部結果であり、氏

の適切な解説によって拝見の機会を得たことは

幸甚であった。

尚今後共々く研究の場を繋ぐ紐帯として本会の  
堅実な発展と共に希冀して止まない。

。岩木山麓における縄文時代の堅穴住居址につい  
て 弘前大学 村越 潔

（返って掲載の予定）

。津軽信政と吉川神道 弘前実業高 小館 袁三

（幾二十三号に論文として掲載）

。金沢文庫存続の意義

東奥義塾高 佐藤和夫

金沢文庫の存在は中世文化史上高く評価されて

いるが、金沢文庫そのものの機能は今日結城陸前

氏によつて再検討されている。金沢氏、金沢文庫、

称名寺は三者一体の關係にあり金沢氏滅亡後は称

名寺が主体となつて活動を続け後世に金沢文庫の

名を高からしめて金沢文庫の名の及がクローズア

ツプされて実際に運営に努力した称名寺は余り重

要視されていない。金沢文庫が中世に於いて非常

に重要な意義をもつものであるがそれは又奥東に

於ける文化のパロメーターということも云える。

が文庫の運営は一体何によって支えられていたのか大きな問題となる。政治権力が最初の背景であったが同時に豊かな経済力が文庫経営の主体者であり、それを支えていたのであって、採名寺の健全な運営こそ信侶の活躍を促し文化の興隆も行われたのである。

そこで版表を採名寺の経済力の推移におき寺領の性格にふれ寺領の変遷と採名寺財政の關係を考へ、その対策をいかにしたかを個別的にとらえてみる。

文化の活動が採名寺の場合所領を足場として近隣の地域に展開されてゆくが、その展開の場面は何らかの形で採名寺と關係のある場合が多く、地域社会の把握が文化伝播の大切な要因であることは今も替りはないが、土地所有が基本的に生活の上に大きく左右する時代にあつては所領を失ふことは活動の基の根を止められるようなものであつた。採名寺及びそれに直接つながる金沢文庫の例を通じて中世の精神活動の背景の意義を明らかにすることが目的である。